



日航機事故をめぐる 新聞記者たちの1週間

命を追った、あの夏。
走れ、叫び、泣いた。新聞記者たちの激動の7日間。

日航機墜落の報が北関東新聞社に入り、編集部で全権を任されたデスクの悠木和雅（堤真一）の記者としての大事故を扱う興奮、中央紙との

「クライマーズ・ハイ」

1985年8月12日、乗客乗員524名を乗せた日航機123便が、群馬県御巣鷹山に墜落した日航機事故をめぐる、取材にかけずりまわる地元の新聞社と新聞記者たちの姿を描く社会派ドラマ。原作は、実際に群馬県の方新聞記者として日航機墜落の取材をした作家・横山秀夫の同名小説。

スクープ合戦、組織や家族との衝突などをおりまぜて、感情が激しく交わる事故から1週間を描く人間ドラマです。

とくに、事故の直後から動き出す地元記者たちの取材活動。社長や編集局内の確執や販売局との対立といった事態に直面しながら、編集局内の動きを追います。また同時進行で、時間も不規則な記者たちの家族や生活にもスポットをあて、映画としての醍醐味が存分に味わえる作品に仕上がっています。クライマーである主人公が谷川岳のクライミングを家族や友人との葛藤の中で行う姿も印象的です。

このシネマ

クライマー



後藤又兵衛の碑と説明板

の大軍を迎え撃って討ち死にした地でもありません。後藤又兵衛は安土桃山時代から江戸時代にかけての豪傑武将。黒田如水や豊臣秀頼に仕えました。戦いは、現在の市立老人福祉センター「やすらぎの園」が建っている小松山あたりを中心、玉手山公園一帯が戦場となりました。公園一帯には、又兵衛基次の碑を始めとして、両軍戦死者供養塔や戦跡碑、徳川方の武将の墓などが残されています。

この戦いで豊臣方を率いていた後藤又兵衛基次は傷を受けて戦闘の指揮がとれなくなり、切腹したと伝えられています。高さ2メートルを超える後藤又兵衛の碑は市立玉手山公園の小高い丘の中にあります。

また、大坂夏の陣で、徳川方で討ち死にした奥田三郎右衛門、山田十郎兵衛の碑も建てられています。

大阪近郊の家族的遊園地として人気のあった「玉手山遊園地」が閉鎖し、柏原市立玉手山公園としてオープンしたのは1999年（平成11）3月でした。総面積は、約6万8000平方メートル。入園は無料です。春は桜、初夏は新緑とツツジ、秋には紅葉など、園内には自然がいっぱいあります。アスレチック風の大遊具も設けられます。

この玉手山は、1614年（慶長19）の大坂冬の陣、翌年の大坂夏の陣と、2度にわたって豊臣氏と徳川氏の合戦が行われた場所でもあります、とくに豊臣氏の存亡をかけた大坂夏の陣では、豊臣方の先陣・後藤又兵衛基次が、徳川方

大坂夏の陣と玉手山

摂津
河内
和泉
おおさか
三國誌

34

（柏原市）

ザ・見遊じあむ

明るく楽しさあふれる田辺聖子さんの書斎



ミュージアムメモ

▶所在地／〒577-8550 東大阪市菱屋西4-2-26 大阪樟蔭女子大学小阪キャンパス図書館内▶交通／近鉄奈良線小阪駅から徒歩5分▶開館時間／午前9時～午後5時（土曜は午後4時まで）▶休館日／日曜日、祝日、大学の休業日▶入場料／無料▶問い合わせ／大阪樟蔭女子大学図書館 ☎06-6723-8182

おもしろいのは「田辺聖子の書斎」。大きなスヌーピーのぬいぐるみをはじめ、おもちゃ箱のような仕事場は見るからに楽しそう。この空間からあの田辺聖子ワールドがひろがっていくのです。

「文学少女セイコ」夢ひらく「田辺聖子」文学ウォール」は壁一面にびっしりと作品が展示、その表紙の装丁の面白さも楽しめます。

田辺聖子文学館

（東大阪市）

「聖子ワールド」の明るさが魅力

大阪ゆかりの作家・田辺聖子は1947年に、大阪樟蔭女子専門学校（大阪樟蔭女子大学の前身）を卒業しました。そして、2007年6月、母校の大阪樟蔭女子大学創立90周年の記念事業として、大学図書館内に田辺聖子文学館が誕生しました。

田辺聖子は幼少時から古典文学に親しみ、多くの少女小説を愛読しました。1964年に『感傷旅行センチメンタル・ジャーニー』で芥川賞受賞。作品に大阪弁を使うユーモアのある作品で人気を得ました。2006年には、エッセイなどを元に朝の連続テレビ小説『芋たこなんきん』（NHK大阪放送局制作）が作られて人気を得ました。

大学の校門を入り、すぐのところに図書館があり、その1階のスペースが田辺聖子文学館になっています。エントランスには在学当時の正門で友人たちと並んで写した若き日の大きな写真が迎えてくれます。最初の展示の「田辺聖子年譜」から始まって「夢ふくらむ」樟蔭女子専門学校での田辺聖子「夢うまれる

大阪の戦跡を歩く

第33歩

傷痍軍人の碑

（貝塚市）



傷痍軍人の碑とその碑文



全国にある護国神社や、戦跡の碑などにあわせて、建てられているのが「傷痍軍人の碑」です。傷痍軍人という言葉も最近ではあまり耳にすることはありませんが、全国には会組織として残っています。貝塚市の天文台がある善兵衛ランドの横には、10メートル近い高さの忠霊塔とともに、傷痍軍人の碑があります。1982年4月の建立で、碑には「我らは過ぐる大戦、事変に際し、戦場において身をもって現実に戦争の悲惨さを体験し、その後も苦難の生涯を続けてきた。…再び戦禍の起こらないことを願い、ひたすら世界の恒久平和を祈念する」と書かれています。

「夏は来ぬ」

卯の花の 匂う垣根に
ほととぎす 夏も来鳴きて
しのび寝もらす 夏は来ぬ

夏の定番の唱歌という、まず思い出されるのがこの「夏は来ぬ」。作詞：佐佐木信綱、作曲：小山作之助のコンビの作品です。明治29年5月「新編教育唱歌集5」に発表されました。1番の歌詞にでてくる卯の花はウツギ（空木）の花の略称です。現在の教科書は、1番と5番のみの掲載ですが、5番まで順番に歌うと初夏の日本の風情がしのばれます。「夏は来ぬ」は「夏がきた」という意味で「夏がこない」という意味ではありません。この場合は「夏は来ず（こず）」といえます。

いまも心に響く
名詩・名歌・名語録

「夏の思い出」

夏がくれば思い出す はるかな尾瀬 遠い空
霧の中に浮かびくる やさしい影 野の小道
水芭蕉の花が咲いている 夢見て咲いている 水のほとり
しゃくなげ色にたそがれる はるかな尾瀬 遠い空

夏の定番の歌のひとつ。江間章子／作詞、中田喜直／作曲。終戦から4年後、1949年6月に石井好子の歌でNHKラジオ歌謡の中で紹介されて全国に広まりました。この歌で尾瀬といえば水芭蕉が定着し、6月のシーズンには登山者であふれます。江間章子は終戦の前年に、隣に住んでいた青年に声をかけられて尾瀬に行った記憶があまりにも鮮明で、その時の情景を詩に書いたといえます。